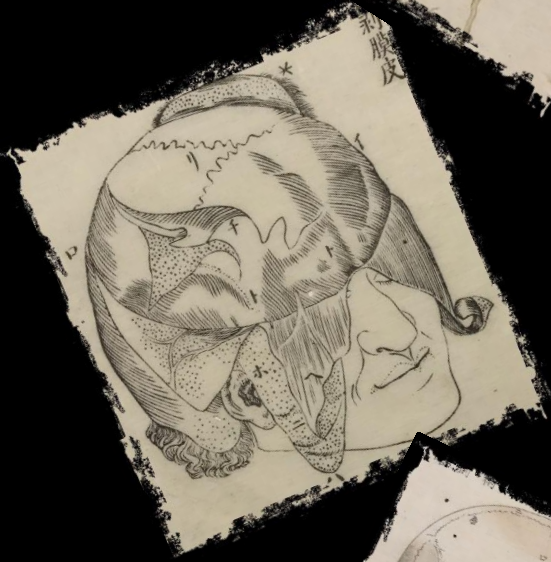


平成29年度第2回医学情報センター貴重書展示

腑分けの絵

江戸時代の解剖図



医学情報センター 1階
平成29年8月18日～10月22日

当時の日本では、死体を傷つけることはタブーとされており、人体の内部の様子を実際に確かめる術はありませんでした。1754（宝暦4）年、山脇東洋は京都の刑場で行われた死刑囚の解剖に立ち会う機会を得、その様子を『蔵志』という書にまとめました。日本における人体解剖は、これをきっかけに盛んに行われるようになったとされています。

1771（明和8）年には、杉田玄白、前野良沢、中川淳庵らが江戸の刑場で死刑囚の解剖に立ち会いました。その際、オランダ語の医学書『ターヘル・アナトミア』の解剖図と比較してその正確さに驚き、同著の翻訳を決意し、4年かけて『解体新書』を刊行しました。

今回の展示では、江戸時代に記された医学書を展示し、はじめて人体の内部を目の当たりにした当時の医師たちの描いた、現在とはだいぶ様子の異なる解剖図を紹介します。

・各骨真形圖 1帖

[各務文献] 著

[文化7（1810）] 刊 25.5×18 cm（折本）

「整骨新書3巻」の附圖、圖32枚

・[(重訂) 解体新書銅版全図] 1帖

J.A.Kulmus 原画、南 [小柿] 寧一画、中伊三郎鏤刻

刊 25.5×17 cm（折本）

題簽欠落、文政4（1821）の跋

・解体發蒙（覆刻） 5巻附1巻5冊

（題簽：藏府真寫解体發蒙）

三谷樸（公器）著

東京 澤田健 昭和5（1930）年刊 25×17.5cm

原本：文化10年大坂河内屋茂兵衛刊本

・解剖存真圖（覆刻） 肺・心臓編 4枚

南小柿寧一画

刊 44×27cm

講談社複製「解剖存真圖」（原本：文政2年刊、慶應義塾大学図書館所蔵）からの
抜萃複製